HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本現代詩の比較文学研究 ： 田村隆一と２０世紀の世界文学の共振［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	陳, 璇
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14570号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81441
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Chen_Xuan_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　陳　　璇

学位論文題名

日本現代詩の比較文学研究――田村隆一と 20 世紀の世界文学の共振――

・本論文の観点と方法

本論文は、田村隆一のアメリカにおける IWP（インターナショナル・ライティング・プログラム）体験と、彼の詩的創作との間の関係を解明し、現代の日本詩人と海外における集団的な文芸活動との共振関係を検討したものである。日本現代詩と外国文学との間に生じた関係のあり方を共振関係として定義し、多面的に考察した。田村は代表的な日本の現代詩人であり、また、戦後において国際的な文学交流に参加した日本の詩人としても先駆者である。彼は 1967 年に IWP の創設者ポール・エングルの招請を受け、アメリカに渡航し、これを契機としてそのスタイルは大きく転換した。すなわち、初期の緊迫した言語と抽象的な表現で戦争の危機と恐怖を表象する詩法から、ライト・ヴァースの様式による日常的な生活体験の表現へと変容を遂げた。本論文はその経緯を、比較文学・文化交流史の方法によって掘り下げ、事実関係を実証的に明らかにするとともに、それが具体的な詩作品にどのように投影したかを綿密に探ったものである。

・本論文の内容

本論文は序論と三章構成となっている。序論では日本現代詩の比較文学的研究に関する研究史を通観し、本論の目的を、日本詩人と世界文学との共振関係を追究することに置くとしている。

第一章では、IWP と田村隆一との関わりを、IWP を主導したアイオワの詩人ポール・エングルとの交流や、そこにおける田村の位置づけなどを通して検証した。田村が初めて渡米した 1960 年代末期は、日本の現代詩が海外においていまだ問題にされなかった時代であった。他方で当時はアメリカ国内のクリエイティブ・ライティング・プログラムが発展を遂げ、その延長線上に、1967 年にアイオワ大学でエングルと妻の聶華苓が、世界の作家を対象とする IWP を創設したのである。田村は IWP に招かれた最初の日本詩人である。IWP において田村は海外の作家・詩人・研究者との交流の機会を持ち、多次元のネットワークの中に位置づけられるようになった。

IWP に招待された作家の中には、民族衝突によって引き起こされた大規模な騒乱の被害者や、ナチス強制収容所の経験者、ファシズムへの抵抗運動を行った者がいる。彼らの全体主義への批判、言語と表現の自由の尊重、および個人の価値の強調は、冷戦期において IWP が基礎とした価値基準となった。田村が IWP に招待された理由は、彼が戦争を体験した詩人として培った戦争に対する反省、および個人の価値を重視する詩創作の理念が、IWP の創立者やメンバーらと一致したことにあるとされる。

田村の詩は、日本人のトラウマを言語化する一方、日本人の視座から戦争の惨禍が人間の共同体に残した傷口を呈示することにより、世界的な読者の共鳴を喚起する力があった。従って彼の詩は、日本的でありながら、世界的であると言える。散文詩「予感」においては、戦中世代の孤立感、敗戦によって導かれた破滅感と断絶感、および戦後の危機と恐怖に追われる緊迫感など、重層的な感情の歴史が演劇的に表象されている。田村は死と生の運命に支配された人生および精神の、破滅から再生への試練という、戦間期に生まれた日本詩人たちに特有な苦難の体験を詩によって表現した。一方、田村の詩は翻訳作業によって、アイオワ大学の校内外で好評を博した。彼の英訳詩集も 1970 年代からアメリカで次々と上梓された。本論文では田村の詩「言葉のない世界（World Without Words）」を取り上げ、起点志向の

タカロ・ウチノ・レントと目標志向のクリストファー・ドレイクの翻訳テクストを比較対照して分析し、対極に位置する両者の翻訳ストラテジーを呈示した。

第二章では、後期の田村がネガティヴな評言を受ける主な原因とされてきたライト・ヴァースの問題を取り上げている。本論文では田村に深く影響を及ぼした詩人 W.H.オーデンのライト・ヴァース論を検討し、田村の詩風の転換にもかかわらず、その底流に流れる一貫性を明らかにした。田村が共鳴したのは 1930 年代イギリスの急進的な左翼詩人オーデンではなく、政治に対する姿勢が慎重になり、創作にも脱政治的な傾きが顕著に表れる 1940 年代以降のアメリカ詩人のオーデンである。ライト・ヴァースにおいては、詩の目的を、政治観念の表出ではなく生活の真実を伝えるものとし、集団における個的人間の重要性を強調するに至った。田村はオーデンの詩句を導入し、垂直／水平の対象を軸とした人間の実存のあり方を語った。生と死、創造的な言語（母語）と死語（外国語）、個性的な人間と無個性な人間など、すべての対立項がこの参照系に位置づけられる。生涯、人間の実存に深く関心を持っていた田村にとって、ライト・ヴァースは、大量生産と大量消費の危機に対峙する新たな姿勢であると論じられる。オーデンは人格を持つ人間を「個的な人間」（singular person）と定義し、「真理に対する共通の愛によって結ばれた『あなたとわたし』」のことを共同体と定義した。田村の「垂直的人間」はオーデンの「個的な人間」と同じ意味である。田村はアイオワに理想的な共同体を見、そこで各国作家と交流しているうちに、人間の共同体の意味を痛切に体験した。本論文は田村の日記「アメリカからの手紙」と 1970 年代以降の詩作を中心として、北米の異文化体験と彼の後期の詩作の関連性を明らかにした。

第三章においては、1960 年代のアメリカが田村に与えた大都市と田舎町の二極対立のイメージを分析している。前者はシカゴ、ニューヨークを代表として、「陰惨」、「動乱」、「犯罪」、「牢獄のごとき」と表現され、それに対して、アイオワは「小さな不変不動」の田舎町と述べられる。シカゴを訪問した経験に基づいて、田村は詩「黄金の腕」を書き、1960 年代末のアメリカ大都市から 1980 年代の東京を望見した。すなわち政治上の欺瞞と経済上の空景気によって、金権主義社会における「垂直的な人間」の不在を表現した。他方、アイオワでの日常生活を基に、田村は詩「暗緑色の遠心分離機」を書き、「緑の世界」のアイオワと 1980 年代の日本というコントラストによって、真である共同体と、権力に対する批判や自己決定を行う能力を喪失した「一次元的な人間」「『非個性』という絶対値」で形成された「固体」（「蟻」）という、対極の世界の光景を呈示したと論じる。結局、田村はアイオワの「腕ぷしの強い農夫」から「ほんとうの詩人」像を発見したとされる。それは孤独な人間でありながら、強靭な精神を持つ人間である。彼は無限なる言葉の海において、人間実存の真実を探求したと論じられる。

結論として、IWP のメンバーとしての田村は、「日本」という共同体から遠く離れ、単なる「詩人」として世界文学の交流に参加し、「日本戦後詩人」の田村像は希薄になり、「世界詩人田村隆一」として表象されるようになったとされる。彼の IWP への参加は、日本詩人の国際交流に新しい方式を導入した一方、冷戦期の国際文学流史の一環と見做すことができ、それは今後の日本現代詩の比較文学研究に新たな視座をもたらすものであると締め括られる。